シゲジロウ話・涙(なだ)こぼえる

シゲジロウは実に頓知のいい人であった。シゲジロウはなもかも賤しくていやしくていたもだたど。若げ者がだの仲間で集まって飲み食いするごどの話こ、決めたわげだ。皆して飲み食いの物、出すごどにして。したども、今までに一回も出さねがたもの。シゲジロウ、次に俺持てくるえって、とどて、いつも人のばかりごっつぉなてるもだたべ。そしたら次の日に、今度若げ者がた、まだバシ(嘘)まげるえてシゲジロウどご、かでね(仲間に入れない)ごとにして、自分方で鍋をかけて煮ていて、戸には錠をかけておいだど。シゲジロウ、そしたばそれ分かっているために、戸の前にきて大声で「こぼえる(こぼれる)、こぼえる」と叫んだど。中にいた若げ者方二、三人もして、それ聞いて、うめぇ(美味い)もの何かシゲジロウ持ってきたど思って、さっそぐ戸を開けに出だわげだ。シゲジロウ何も持たねで言うには、「あんまりと開かなくて、涙、出できたものだから、コボエル、コボエルってしゃべたなだ」と言った。

したば今度、鍋さ蓋してあるもんだがら、まだ今度はこう言った。「俺、先(さぎ)た、来るどぎ巡査どやっこ(乞食)、喧嘩していたのを見できた」「したば、巡査、刀振り回して、やっこサかがていたけば」「やっこしたば、ヤッと、手あげて押さえるものであったわげだ」、とゆって(言って)シゲジロウ今度、鍋の蓋取て、刀押さえる真似して見せだたけ。それで鍋の蓋開いたものだがら、シゲジロウにかて、皆鍋の物、かえ(食われ)でしまった、という話。

鎌田林治(上母体　83歳)

〈解説〉

シゲジロウを皆がやっつけようとしても、それを上回る機転をきか

して、見事に目的を達する話である。『伝承文芸』に坊ヶ崎の大山ヨコさんが同じ話を語っている。